TADOKU JUNIOR　ピノッキオの冒険　★★★☆☆ ふつう　763語

Pinocchio, Chapter 25

第25章　いい子になる約束

Carlo Collodi (tr. Carol Della Chiesa, 1909)（1883年の本）　原文そのまま　朗読：Mark F. Smith

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　やっとめぐりあえた空色の髪のようせい。ピノッキオは「本当の男の子になりたい」と打ち明けます。そのためにしなければならないこととは？



Pinocchio promises the Fairy to be good and to study, as he is growing tired of being a Marionette, and wishes to become a real boy.

If Pinocchio cried much longer, the little woman thought he would melt away, so she finally admitted that she was the little Fairy with Azure Hair.

“You rascal of a Marionette! How did you know it was I?” she asked, laughing.

“My love for you told me who you were.”

“Do you remember? You left me when I was a little girl and now you find me a grown woman. I am so old, I could almost be your mother!”

“I am very glad of that, for then I can call you mother instead of sister. For a long time I have wanted a mother, just like other boys. But how did you grow so quickly?”

“That’s a secret!”

“Tell it to me. I also want to grow a little. Look at me! I have never grown higher than a penny’s worth of cheese.”

“But you can’t grow,” answered the Fairy.

“Why not?”

“Because Marionettes never grow. They are born Marionettes, they live Marionettes, and they die Marionettes.”

“Oh, I’m tired of always being a Marionette!” cried Pinocchio disgustedly. “It’s about time for me to grow into a man as everyone else does.”

“And you will if you deserve it—”

“Really? What can I do to deserve it?”

“It’s a very simple matter. Try to act like a well-behaved child.”

“Don’t you think I do?”

“Far from it! Good boys are obedient, and you, on the contrary—”

“And I never obey.”

“Good boys love study and work, but you—”

“And I, on the contrary, am a lazy fellow and a tramp all year round.”

“Good boys always tell the truth.”

“And I always tell lies.”

“Good boys go gladly to school.”

“And I get sick if I go to school. From now on I’ll be different.”

“Do you promise?”

“I promise. I want to become a good boy and be a comfort to my father. Where is my poor father now?”

“I do not know.”

“Will I ever be lucky enough to find him and embrace him once more?”

“I think so. Indeed, I am sure of it.”

At this answer, Pinocchio’s happiness was very great. He grasped the Fairy’s hands and kissed them so hard that it looked as if he had lost his head. Then lifting his face, he looked at her lovingly and asked: “Tell me, little Mother, it isn’t true that you are dead, is it?”

“It doesn’t seem so,” answered the Fairy, smiling.

“If you only knew how I suffered and how I wept when I read ‘Here lies—‘”

“I know it, and for that I have forgiven you. The depth of your sorrow made me see that you have a kind heart. There is always hope for boys with hearts such as yours, though they may often be very mischievous. This is the reason why I have come so far to look for you. From now on, I’ll be your own little mother.”

“Oh! How lovely!” cried Pinocchio, jumping with joy.

“You will obey me always and do as I wish?”

“Gladly, very gladly, more than gladly!”

“Beginning tomorrow,” said the Fairy, “you’ll go to school every day.”

Pinocchio’s face fell a little.

“Then you will choose the trade you like best.”

Pinocchio became more serious.

“What are you mumbling to yourself?” asked the Fairy.

“I was just saying,” whined the Marionette in a whisper, “that it seems too late for me to go to school now.”

“No, indeed. Remember it is never too late to learn.”

“But I don’t want either trade or profession.”

“Why?”

“Because work wearies me!”

“My dear boy,” said the Fairy, “people who speak as you do usually end their days either in a prison or in a hospital. A man, remember, whether rich or poor, should do something in this world. No one can find happiness without work. Woe betide the lazy fellow! Laziness is a serious illness and one must cure it immediately; yes, even from early childhood. If not, it will kill you in the end.”

These words touched Pinocchio’s heart. He lifted his eyes to his Fairy and said seriously: “I’ll work; I’ll study; I’ll do all you tell me. After all, the life of a Marionette has grown very tiresome to me and I want to become a boy, no matter how hard it is. You promise that, do you not?”

“Yes, I promise, and now it is up to you.”

あやつり人形でいることにあきてきたピノッキオは、本当の男の子になりたいと願い、いい子になって勉強するとようせいに約束します。

これ以上ピノッキオが泣きつづけたら、とけてなくなってしまうと思い、小がらな女の人はとうとう、自分が空色の髪のようせいだとみとめました。

「いたずらなあやつり人形さんね！どうしてわたしだとわかったの？」と、ようせいは笑いながらたずねました。

「あなたが大好きな気持ちが、教えてくれたんです。」

「おぼえている？あなたがわたしのもとを去ったとき、わたしは小さな女の子だったのに、今ではすっかり大人の女の人よ。こんなに年をとったから、あなたのお母さんにだってなれそうなくらいだわ！」

「それはとてもうれしいです。だって、お姉さんじゃなくて、お母さんってよべるもの。ずっと前から、ほかの男の子たちみたいに、お母さんがほしかったんです。でも、どうしてそんなに早く大きくなったの？」

「それはひみつよ！」

「教えてください。ぼくも少し大きくなりたいんです。ぼくを見て！1ペニー分のチーズくらいの背たけから、ちっとも大きくなっていないんです。」

「でも、あなたは大きくなれないのよ。」とようせいは答えました。

「どうして？」

「あやつり人形は大きくならないからよ。あやつり人形として生まれ、あやつり人形として生き、あやつり人形として死ぬの。」

「ああ、いつまでもあやつり人形なのは、もううんざり！」とピノッキオはいやそうにさけびました。「ぼくだって、そろそろみんなと同じように、大きくなって大人になってもいいころです。」

「それにふさわしい子になれば、なれるわよ――」

「本当？ふさわしい子になるには、どうしたらいいの？」

「とてもかんたんなことよ。おりこうな子のようにふるまえばいいの。」

「ぼく、そうしていないと思う？」

「とんでもない！いい子は言うことを聞くけれど、あなたは反対に――」

「ぼくはちっとも言うことを聞かない。」

「いい子は勉強やはたらくことが好きだけど、あなたは――」

「ぼくは反対に、一年じゅうなまけ者で、ぶらぶらしてばかり。」

「いい子はいつも本当のことを言うわ。」

「ぼくはいつもうそをつく。」

「いい子はよろこんで学校へ行くわ。」

「ぼくは学校へ行くと病気になっちゃう。でも、これからは変わります。」

「約束する？」

「約束します。いい子になって、お父さんを安心させてあげたいんです。かわいそうなお父さんは、今どこにいるんだろう？」

「わからないわ。」

「ぼくはいつか、お父さんを見つけて、もう一度だきしめることができるでしょうか？」

「できると思うわ。いいえ、きっとできるわ。」

その答えを聞いて、ピノッキオはとても幸せな気持ちになりました。ようせいの手をにぎって、むちゅうでキスをしたので、まるでわれをわすれてしまったかのようでした。それから顔を上げ、愛情をこめてようせいを見つめてたずねました。「ねえ、お母さん、あなたが死んだっていうのは、本当じゃないよね？」

「どうやら、死んではいないみたいね。」とようせいはほほえんで答えました。

「『ここにねむる――』って読んだとき、ぼくがどんなにつらくて、どんなに泣いたか、わかってもらえたらなあ！」

「知っているわ。だから、あなたをゆるしてあげたのよ。あなたがあんなに深く悲しんだのを見て、心のやさしい子だとわかったの。あなたのような心を持った子には、いつだって望みがあるわ。たとえ、とてもいたずらなことが多くてもね。だから、わたしはこんな遠くまで、あなたをさがしに来たのよ。これからは、わたしがあなたのお母さんになってあげる。」

「わあ！なんてすてきなんだ！」とピノッキオはとび上がってよろこびました。

「いつもわたしの言うことを聞いて、わたしの思うとおりにする？」

「よろこんで、とってもよろこんで、もっともっとよろこんで！」

「あしたから、」とようせいは言いました。「毎日学校へ行くのよ。」

ピノッキオの顔が、少しくもりました。

「それから、いちばん好きな仕事をえらぶのよ。」

ピノッキオは、ますます真顔になりました。

「何をぶつぶつ言っているの？」とようせいはたずねました。

「ただ、」とあやつり人形は小さな声でぐずぐず言いました。「今から学校へ行くのは、おそすぎるみたいだって言ったんです。」

「いいえ、そんなことないわ。おぼえておきなさい、学ぶのに、おそすぎるということはないのよ。」

「でも、ぼくは仕事も職業もいりません。」

「どうして？」

「はたらくと、つかれちゃうから！」

「ねえ、ぼうや、」とようせいは言いました。「あなたのようなことを言う人は、たいてい、さいごはろうやか病院で一生を終えるものよ。いい？　お金持ちでもまずしくても、人はこの世で何かをしなければならないの。はたらかずに幸せになれる人はいないのよ。なまけ者には、わざわいがあるわ！なまけぐせは重い病気で、すぐになおさなければいけないの。そう、小さな子どものうちからね。そうしないと、さいごにはそれで身をほろぼしてしまうわ。」

この言葉は、ピノッキオの心にひびきました。ピノッキオはようせいを見上げて、まじめに言いました。「ぼく、はたらきます。勉強します。言われたことは全部やります。だって、あやつり人形のくらしには、もうすっかりあきちゃったし、どんなに大変でも、男の子になりたいんです。約束してくれますよね？」

「ええ、約束するわ。あとはあなたしだいよ。」

たんご と クイズ　第25章　いい子になる約束

Marionette あやつり人形	**mother** お母さん	**cheese** チーズ
school 学校	**hands** 手	**hospital** 病院

Q1 ピノッキオが大きくなれないのは、どうして？

① チーズを食べないから　② よくねないから　③ あやつり人形は大きくならないから

Q2 ようせいが遠くまでピノッキオをさがしに来たのは、どうして？

① おこりに来たから　② やさしい心があるとわかったから　③ 道にまよったから

Q3 ようせいは、あしたから何をしなさいと言った？

① 毎日学校へ行く　② 海で泳ぐ　③ 船を作る

こたえ

Q1　③　ようせいは「あやつり人形は大きくならない。人形として生まれ、人形として生きるの」と教えました。

Q2　②　ピノッキオが深く悲しんだのを見て、心のやさしい子だとわかったからです。だからゆるしてくれました。

Q3　①　「あしたから毎日学校へ行くのよ」と言われて、ピノッキオの顔は少しくもりました。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #500（Carlo Collodi (tr. Carol Della Chiesa, 1909)、1883年）。パブリックドメイン。

挿絵：この本には挿絵がないため、場面をイメージして AI（Codex）で描いた絵です。

朗読（Web版）：Mark F. Smith（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）

和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。